

## ◇公開講座専門委員会

### ●第1回 地域連携推進機構生涯学習部門公開講座専門委員会

開催日時：平成30年11月12日（月）14：45～15：40

開催場所：五福キャンパス 事務局5階大会議室

杉谷キャンパス 打合室（大）

高岡キャンパス 打合室（テレビ会議システム使用）

議 題（1）平成30年度公開講座事業報告について

（2）平成31年度公開講座事業計画について

### ●第2回 地域連携推進機構生涯学習部門公開講座専門委員会

開催日時：平成31年1月23日（水）16：30～17：15

開催場所：五福キャンパス 事務局5階大会議室

杉谷キャンパス 打合室（大）

高岡キャンパス 打合室（テレビ会議システム使用）

議 題（1）平成31年度公開講座実施計画について

## ◇北陸地区社会貢献系専門委員会

### ●平成30年度北陸地区国立大学連合協議会社会貢献系専門委員会

開催日時：平成30年11月26日（月）14:25～15:25

開催場所：金沢大学 サテライト・プラザ

議 題（1）平成30年度まちなかセミナー実施報告について

（2）平成31年度社会貢献系専門委員会事業計画について

## ◇全国会議

### ●全国国立大学生涯学習系センター研究協議会と文部科学省との意見交換会

開催日時：平成30年8月27日（月）15:00～17:00

開催場所：文部科学省生涯学習政策局会議室

議 題 文部科学省からの行政報告、研究協議会からの報告、意見交換（協議）

### ●第40回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会

開催日時：平成30年9月18日（火）～19日（水）

開催場所：宇都宮大学峰キャンパス（当番校：宇都宮大学）

主 題：大学生涯学習の“これまで”と“これから”-温故知新からの未来創造-

1日目

実務者ワークショップ、事業実施報告「国立大学生涯学習系センター研究協議会の「40年のあゆみ」、基調講演「生涯学習キーワードの40年史-専門誌編集者が語る生涯学習振興施策・事業の流行と栄枯盛衰-」、フォーラム「リカレント型社会」の創造に向けて-地域住民の「学習と活躍」の循環基点としての大学の可能性-、全国国立大学生涯学習系センター

研究協議会総会

2日目

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会 全体会・分散会

## ◇富山大学生涯学習推進懇話会

日時 平成31年3月13日(水) 10:03～11:33

場所 富山大学事務局 大会議室

主催 富山大学地域連携推進機構生涯学習部門

趣旨 富山大学生涯学習推進懇話会要項に基づき、学外有識者から意見を聴き、多様化・高度化する学習状況や地域のニーズに対応した効果的な学習事業を提供し、生涯学習事業をより円滑に推進するとともに、その実施状況について評価を受けるため開催する。

### 出席者

#### 委員

- 菊池 政則 (富山県教育委員会生涯学習・文化財室長)
- 山崎 弘一 (富山県民生涯学習カレッジ学長)
- 中西 彰 (富山県生涯学習団体協議会会長)
- 古木 繁行 (富山市市民学習センター所長)
- 水野 清 (北日本放送(株)常務取締役業務本部報道制作担当)
- 織田 浩之 ((株)北日本新聞社編集局長)
- 佐野 友昭 (富山県立小杉高等学校校長)

### 富山大学

- 遠藤 俊郎 (学長)
- 鈴木 基史 (地域連携推進機構長 理事・副学長(地域貢献担当))
- 森口 毅彦 (地域連携推進機構生涯学習部門長)
- 藤田公仁子 (地域連携推進機構生涯学習部門副部門長)
- 仲嶺 政光 (地域連携推進機構生涯学習部門准教授)
- 佐々木秀樹 (研究振興部長)
- 石塚 久博 (研究振興部社会貢献課長)
- 桐井久美枝 (研究振興部社会貢献課専門職)
- 森本 直幸 (研究振興部社会貢献課係長)
- 針山 美佳 (研究振興部社会貢献課係員)

## 1. 開会の辞

富山大学地域連携推進機構の生涯学習部門長森口毅彦から、以下の挨拶があった。

この生涯学習推進懇話会は、1999年に前身の大学開放推進懇話会が発足して以来毎年開催されている。生涯学習部門の1年間の活動を振り返り、皆さまから頂いたご意見、ご要望を基に今後の

活動につなげていくための貴重な機会になっている。

これまで生涯学習部門は学びの場の提供を使命として活動してきたが、生涯にわたって学び続ける意義や重要性が改めて認識されるようになり、多様な学びに対応した学習機会の提供が求められるようになってきている。そこで、生涯学習部門としても、そうしたニーズに対応するために新たな枠組みを作る必要性を痛感している。今後、時代のニーズにより一層対応した学びの場を提供していくためにも、委員の皆さまから忌憚のないご意見を賜りたい。

## 2. 出席者の紹介・資料確認

## 3. 座長選出

富山県民生涯学習カレッジ学長の山崎弘一委員が座長に選出され、挨拶があった。

## 4. 議題

(1) 平成 30 年度生涯学習部門事業・活動報告について

(2) 富山大学生涯学習の在り方についての評価と提言について

議題 (1) において、森口生涯学習部門長から、生涯学習部門平成 30 年度事業の概要について報告があった。

続いて、仲嶺准教授から、公開講座の実施状況と受講生アンケートの結果報告、オープン・クラスの実施状況と受講生アンケートの結果報告、「富山大学と富山県立小杉高等学校との高大連携事業」「北陸 4 大学連携まちなかセミナー」「富山大学サテライト講座」「富山大学の研究を 5 時間で学ぶ講座」の実施報告があった。

森口生涯学習部門長から、「富山大学市民講座 2018」「キャリアデザイン講座」「女性のための再就職支援講座」の実施報告があった。

藤田生涯学習副部門長から、講師紹介等の実績について説明があり、その一例として「ぼうしコレクション」「ジャグリング体験ワークショップ」「ナレッジフォレスト」の説明があった。続いて「生涯学習部門受講生オープンサロン・アカデミールーム」についての説明があった。

最後に森口生涯学習部門長から、平成 31 年度事業計画について説明があった。

その後、議題 (1) に関して質問や意見、議題 (2) に関して評価と提言が各委員から述べられた。

## 5. 閉会の辞

地域連携推進機構長、理事・副学長の鈴木基史から、以下の挨拶があった。

大学でもいろいろ問題点を抱える中で、もう少し大学の役目を発信していこうということで、例えば男女共同参画では、大学内で実施してきた女性教員増員に関する知見を地域住民に還元するために「男女共同参画推進のための学び・キャリア形成支援事業」の予算を文科省から取り、実行してきた。その後、県が予算を獲得してできたマザーズジョブとやまなどからも提携を申し入れていただき、非常に連携が取れてきたと思う。

SDGs の話もあったが、その前段として重要なのは健康で快適で幸せに暮らせることであり、地方創生もその一つである。地方創生のためには学生たちに何とか地元に残ってもらわなければならないということで、リカレント教育の一環として中小企業の方に集まってもらい、大企業とは違っ

た地域企業独自の採用方法を考える採用イノベーションスクールを開催した。今年も県と一緒に実施する予定であり、自治体と企業が一緒になってリカレント教育や地方創生や男女共同参画などに取り組んでいきたいと思っている。今日の皆さんの話を参考にしながら、大学としてどのように生涯学習をやっていくのか、生涯学習の目的やその先にあるものは何なのかを見据えて頑張っていきたいと思っている。

## 意見交換

### (1) 平成 30 年度生涯学習部門事業・活動報告について

### (2) 富山大学生涯学習の在り方についての評価と提言について

(菊池委員) 公開講座の情報を特に若い人たちがウェブで知ることが多いのは全国的な流れであり、今後もこの傾向は続くと思われるので、参加する若者が増えてくるのではないだろうか。また、大学でゼミを経験した人が多くなってきたことから、ゼミのようなことをもう一度経験したいと思う人が多くなっている傾向がオープン・クラスなどで見られるように感じた。反面、若者からすれば何か学んでみたいという気持ちを持ちながらも、場所が分からなかったのウェブで探したら見つかったということもあるだろう。

最近の親はいろいろと不安や悩みを抱え、人と関わりたいという思いを持っている。AIの時代ではあるが、生涯学習においてフェース・トゥ・フェースで向かい合うことが実は大事だと思っている。特に富山県は、人生 100 年時代に対して旗を振って頑張ろうという気持ちが強く、生涯学習においても全国に先駆けて旗を振ってきた。私が富山県民生涯学習カレッジに勤めていた当時、富山大学に対する敷居が高いと感じ、講師を断られるのではないかという思いもあったが、実際は快く引き受けていただき、頼もしく感じていた。今後ご協力いただきたいと思う。また、多様な講座を開いていただいているのを見て、富山県教育委員会として負けていられないという思いを強く持った。

(中西委員) 二つ質問したい。一つは、公開講座で学外講師を迎えることに力を入れられたということだったが、学外とはどのような方を指しているのか。例えば県外、あるいは大学の先生以外の方なのだろうか。もう一つは、都市デザイン学部の先生方の力で若い人が多く受けるようになったということだったが、若い人たちが来られる時間帯に開講していたのか。

2月の全公連の理事会で昨年12月の中教審答申について説明があったが、その内容は少子高齢化時代における社会教育の在り方に関するものだった。最近、SDGsやSociety5.0といった言葉が聞かれるが、これからのことから社会が混沌としたものを感じられるので、これからの社会をしっかりと把握することを前提として、混沌とする社会を生きていくための生涯学習をやっていかなければいけない。これからもそのような点で先端的に開拓していただければと思う。

(大学側：仲嶺) 学外講師の質問については、以前から予算的問題もあり、学外講師の招へいに力を入れているわけではない。また、学外講師については県内講師だけを採用するようにしている。非常勤講師として富山大学に来ている方がほとんどなので、ほぼ大学の先生である。都市デザイン学部の講座開始は18時30分からなので、仕事を終えてからの参加が可能な時間帯である。

(大学側：藤田) 実は仕事を終えてからの参加はなかなか難しい。民間企業では定時に終われないこともあり、駆け込みで来る方や途中参加の方も多いが、現職の方、特に30～40代の方が多い。また、私たちも意外だったのは、高校生の参加もあった。ゼミ形式の話があったが、次の時間までに課題を提示する形の講座が今はとてもはやっており、リピーターが付いている。

学外講師については、語学は非常勤講師が多いが、体験型の講座となると少し異なる。例えば和菓子の講座になると、理論的な部分は教員が担当が、作る部分は和菓子職人に担っていただかなければならないため、教員と職人の両輪で行っている講座もある。

(山崎座長) 確かに人口構造自体も変わっている。昨年度、団塊世代が70代に突入し、一方で少子化は進んでいるので、20～30年後には人口が落ち込んでしまう。日本の人口は今かろうじて1億人だが、20～30年後には8000万人になるといわれている。高齢者の生き方、働き方についても大きな変化が余儀なくされるだろうし、そのような中で生涯学習に対する要請や要望も随分変わっていくと思う。

(大学側：藤田) 私たちも、12月21日に出た文科省の答申を意識しながら次年度は動きたいと思っている。人口問題や地域の動向もあるので、期待されるニーズに対して大学の知がどう応えていくのかというコーディネートもこの部門が担っていくことを視野に入れながら進んでいきたい。

(水野委員) 働き方改革を進めている中、大学の先生もいろいろやっておられて大変だと感じる。生涯学習といっても非常にいろいろな受け皿があるが、その中で国立大学である富山大学、県内最高のアカデミズムである富山大学がやるべき生涯学習とは何なのか、もう一度考えた方がいいのではないか。

一つは、例えば60代の方で学び直したい人のための本格的な学習が求められるし、もう一つは今の若い人は将来に対する経済不安や生活不安を抱えており、キャリアアップに対する自己投資に対する意欲が強いので、そういった内容の学習が求められる。その二つのゼミ講座を柱にした上で、公開イベントやサテライト講座のような広く薄く訴求するような講座も必要だろう。つまり、イベント的な講座とレギュラー的な講座を、選択と集中でめりはりを付けて開いた方がいいのではないか。

それから、「富山大学の研究を5時間で学ぶ講座」は非常に良いのだが、1回100分を土曜日3回にわたって行くと、来る人は土曜日のスケジュールを3回空けなければならない、なかなか大変である。例えば講師には2回ずつ来てもらって、1日で5時間を受講できる組み方もユーザーファーストの視点で考えてはどうだろうか。

それから、日本は図書館の使い方が弱いといわれている。講義は映像でアーカイブできるのだから、インターネットで見せるだけではなく、図書館でいつでも映像で見られるようにするなど、図書館がもっといろいろな形で社会貢献できるように富山大学と連携するといいいのではないかと感じた。

(大学側：仲嶺) 今回は5時間で学ぶ講座を土曜日3回に分け、3人の講師が100分ずつ講義した。それを1日で実施するのはどうかという意見だったが、インターネットの小さな窓を長時間見るのはものすごい労力になる。こま切れになってしまうのだが、5時間継続して視聴するのは難しいこともあり、やむなく現状の形となった。

(大学側：藤田) 5時間の講座はネット配信されていたのだが、ネットを使える人たちも会場にいられていた。フェース・トゥ・フェースで講義を受けたい方も多いのだろう。中には92歳の方も参加されており、自分で来られて笑顔で帰っていかれたことが記憶に残っている。

図書館に関しては、実は「TOYAMA キラリ」にある富山市立図書館本館で、にぎわい創出としていろいろなイベント事業を考えなければならない責務もあるため、今後とも連携を取りたいと思っている。今年度実施したジャグリング講座は、図書館で体を動かす初の講座ということで、図書館サイドも非常に興味を持たれたようだ。いろいろな形で大学から提案していければと考えている。

(山崎座長) 今回5時間を3回に分けたのは、ネット配信もするからというのも多分あるのだろうが、ネット配信の講座は長時間見られるものではない。30分程度が限界で、1時間半や100分の講座は耐えられないという感想を聞いたことがある。それから、60歳以上の方と若い方たちに対する講座についても、ご意見として受け止める。

(古木委員) 大学の各事業で枠組み、内容、周知方法のいずれにもいろいろな工夫があって感心した。われわれ富山市市民学習センターも同じような課題を持っている。一つ目は受講者の減少である。前年度は実人数2100名(延べ人数約3500人)の受講者だったが、今年度の実人数は1890人で、毎年100名程度減っている。逆に平均年齢は少しずつ上がっており、今年度は71歳だった。これを何とかしていかなければならない。

二つ目は内容の充実である。富山大学では語学系を減らしながら本学ならではの講座を増やしていると聞いたが、同様に富山市教育委員会として行う内容にはどのようなものがあるかという、例えば料理やスイーツなどは需要があるが、教育委員会として行うと民の圧迫になるのではないかという課題も抱えている。これからは富山市の施策や市の在り方、将来像といった分野を周知していくことが私たちの責務ではないだろうか。

三つ目は周知の方法である。私たちの周知方法はほとんどが市の広報だが、ネット配信までは手が回っていない。ネット配信をすれば若い人たちにもっと周知できるのではないかと思った。周知方法は今後の課題である。

受講者減の対応策として、この3月議会で、リカレント教育や会社員としての学び直しを何とかできないかという話があった。ただ、市民学習センターとしては、講師の確保や働き方改革などを考えていくと、現在行っている土曜日の九つの授業をさらに増やすのは難しい。そこで、大学のサテライト講座などと連携を図り、富山市全体の学び直しを見ていきたい。これからも連携していければ、曜日や年代にかかわらず市民全体にケアできるのではないかと思う。

内容の充実については、健康や医学、薬学に関する講座には大勢の受講生が来る。今年も健康生活についての講座は定員50名のところ100名の応募があり、抽選にならざるを得なかった。その点は反省として今後は会場を整えていきたいが、内容面では大学の先生方に市民大学の特別講座をいろいろ見ていただいて、今後ともニーズに合わせた連携を富山大学と取っていきたいと思っている。

(山崎座長) 受講者減については、リピーターが多くて新規が少ないという話は昨年度も一昨年度も事務局から課題として出ていた。同時に、そうでもないのではないかという意見も出ていたように思う。高齢化に関しては、先ほどの報告を聞くと、公開講座では若い人が多かったということだった。これは昨年度までと比べての一つの変化なのだろうか。

(大学側：藤田) 内容やテーマによって学び方も変わってきていると感じる。特に都市デザイン学部の内容は、災害とまちづくり、交通の状況など、現代的課題にマッチングしている。今話題になっていることは、世代を選ばず若い人も来られるのではないか。つまり、結果として若い人が集まったということなので、やはり幅広い形で提供していかなければならないということを感じている。

(山崎座長) 結果として新たな受講者も多く来るようになったし、若い人もたくさん来るようになったと理解していいだろうか。

(大学側：藤田) はい。

(大学側：森口) 広報の仕方による影響もあると思う。5時間で学ぶ講座についても、高校生に周知できるようにチラシを配ったところ、シニアに混ざって高校生の受講もあった。若い人にも情報が行き渡る広報の仕方もこれからは求められるのではないか。

(大学側：藤田) 本学は富山県内の生涯学習のコアとしての役目を担っていると思う。そのため、富山地域の富山県民生涯学習カレッジや市民大学を含め、市内や県内でどのような生涯学習機会を提供しているのか、アンテナを張りながらキャッチし、本学の内容がそれらと重ならないように調整・提供していきたいと思っている。

(織田委員) 富山大学は歴史上、三つの大学が統合して新たな富山大学になったという経緯がある。その結果、地方大学の中でこれほど多岐にわたった学部を備えているところはないのではないかと強みがあるが、いかに生涯学習にも発揮されているのではないかと素直な思いである。

今までの報告や意見を聞いた上での感想として、一つは生涯学習の中で公開講座、サテライト講座、オープン・クラスなどいろいろなことをしている一方、区切りが非常に細かく、オープン・クラスとは何をするとところなのか、一般の利用者が一目で分かる形になっているのかどうか気になる。

それから、大学ならではの講座として、もっと専門的な講座があってもいいのではないかと同時に、富山大学の敷居を低くし、さまざまな方に親しんでいただき、地域に積極的に入っていくことも重要なので、体験講座など非常に軟らかいものも実施し、裾野を広げていくことも親しまれるための手立てなのではないか。つまり、専門的な部分とより親しみやすい部分の二極化を進めていくことが、これから大学が開く生涯学習にとって必要ではないか。

また、富山大学や県の生涯学習カレッジなどの擦り合わせやすみ分けを議論する場は現在あるのだろうか。

周知に関しては、若者向けにインターネットの利用という話があったが、一方で還暦を過ぎた人のニーズも高い。そのことから、既存のマスメディアのさらなる利用という発想があってもいいのではないかと。

法人としての富山大学を考えれば、これからは生涯学習を通じた収益面も考えなければならない。富山大学をさらに発展させていくためには、収益を上げていく意識も必要である。収益を上げるにはコストも必要という考え方から、今後生涯学習をやっていく上で地域への貢献だけでなく、経営的観点も必要ではないかという気がしている。

(山崎座長) 県内で生涯学習の機会を提供している機関は多く、大学も県民カレッジも、市町村においてもそのような講座を提供している。そういった機関同士が集まって情報交換して調整する会合として、各地区単位ではあるが広域学習サービス連絡会議という場があることを紹介しておく。

(佐野委員) 富山大学における学習の高校での単位認定、いわゆる高大連携について感謝申し上げる。平成16年度から始まり今年度までの15年で170名の本校生徒が、大学でのレベルの高い講義や研究に触れて、夢や希望を膨らませて上級大学へ進学していった。高大連携というのは、子どもたちの多様化の実態を踏まえ、学外での体験を評価するために国が制度化した。特に大学での学習の単位認定については、平成10年度から制度化された。高大連携によって学習や進路への意識が高まり、さらに学習意欲も高まるという効果があるので、本校が大事にしていることと合致しているところであり、大変感謝している。本校が利用しているオープン・クラスでは、全体の満足度は94%ということだったが、今年度の本校の参加生徒15名の満足度は100%だった。

高大連携に関してもう一つ、魚津高校で新たなキャリアデザインに関する講座が始まった。多くの学校では「総合的な学習の時間」等で地域課題に取り組んでおり、地域を素材に取り込むことで故郷への誇りや愛着を持たせ、将来的に地域に貢献する人材育成に役立つと思っている。学習指導要領が変わり、「総合的な学習の時間」も「総合的な探究の時間」に名称が変わって、探究的要素が多くなる。その点からもこの講座は今後大事になると思っている。

いろいろな高校の立場からすると、このような高大連携を通して子どもたちの次の学びにつながるると同時に、興味関心を持ったときにいつでもどこでも次の学びに向かえるきっかけにもなると思うので、今後もお願いしたい。

(山崎座長) 事業の活動報告に対する質問にとどまらず、今後の在り方も含めたご意見も皆さんから頂いた。大学として何を提供できるか、何をすべきかというあたりから、オープン・クラスの専門的な部分でさらに受け入れるようにしようという話になるのかなと思って聞いていたが、一方では公開講座という形で、広くたくさん受け入れるための講座もすべきだという流れだったと思う。いずれにしても、講座数も受講者数も例年大きな変化はなく、多くの人に受講してもらっているのが実態である。今後ともこのような形で続けていただければということだと思う。